贖う愛
あがな
北川とも
TOMO KITAGAWA•PRESENTS
藤崎寛之丞
KANNOSUKE FUJISAKI•ILLUSTRATION

「くに、ゆ、き。邦之ぃ――」「気持ちいいだろ。お前のここから、トロトロといやらしい蜜が溢れ出してくる」「いっ、あぁ……。ぃ、や、うそ、だ」「だったら、この音はなんだよ」激しく史人のものを扱き立てて、クチュクチュという濡れた音をわざと史人に聞かせる。

贖う愛

《立読み版》

北川　とも

イラスト　藤崎　寛之丞

デスクの上に置かれた郵便物に気づき、青砥邦之（あおとくにゆき）は設計図から視線を上げる。見上げた先には、アルバイトの大坪（おおつぼ）すみれが無表情で立っていた。

先月、知人の紹介で面接を行ったのだが、色気がないところが気に入ったといって、邦之の相棒が勝手に雇った二十歳の女の子だ。

雑用の処理能力の高さはとりあえず邦之も買っているが、色気以前に愛想がなさすぎる。

「郵便物、届いてました」

「ありがとう」

邦之は郵便物を取り上げ、一通ずつチェックしていく。

一級建築士であるだけでなく、三十歳にして建築設計事務所の経営者という肩書を持っているせいか、不動産や投資といったダイレクトメールが多い。それらは封を開けるまでもなく、ゴミ箱に無造作に放り込んでいく。

デスクの上に残った業界誌は暇なときに読むことにして、まずは取引先からのハガキや封筒に目を通そうとした邦之だが、大坪がまだデスクの傍（かたわ）らに立っているのに気づいた。

もういいよと、声をかけようとして大坪のほうを見て、開きかけていた口を閉じる。大坪が興味深そ

うに、デスクの傍らの壁にかけたカレンダーを覗(のぞ)き込んでいたからだ。
短く切った髪に、まったく化粧をしていない大坪の横顔を眺め、ちょっと可愛い顔をした男の子にも見えるなと、どうでもいいことを邦之は考える。
「――この日、何かあるんですか？」
大坪から声をかけられ、邦之は目を丸くする。仕事以外のことで、大坪から質問をぶつけられたのは、これが初めてかもしれない。
「この日……？」
「来週の月曜日です。五月二十四日。花丸がつけてありますよ」
邦之は小さく舌打ちする。カレンダーに花丸をつけるという悪ふざけをするのは、この事務所では邦之の相棒しかいない。
しかし邦之は、すぐに首を傾げる。
大坪が口にした日付にまったく覚えがないからだ。邦之と相棒、お互いの誕生日でないのだけは確かだ。
「……さあ。なんの日かわからないな」

邦之の答えに、今度は大坪が首を傾げる。邦之の仕事部屋に飾ってあるカレンダーに印があるのに、当人がわからないというのも妙な話だと感じたのだろう。

ここで、邦之がデスクの上に置いていた携帯電話が鳴る。取り上げると、大坪は頭を下げて部屋を出て行った。

電話は実家の母親からだった。思わず出そうになった舌打ちを寸前で堪えるが、代わって眉をひそめる。仕事中には電話をかけてくるなと言ってあるのだ。

「お袋、何度も言ってるだろう。仕事中には電話してくるなと――」

『あなた、ちゃんと来週の月曜日は、仕事を休めるんでしょうね』

人の話を聞かないあたりはさすが、あの女の母親といったところか。

嘲(あざけ)りを込めてそう思った邦之だが、次の瞬間には、大坪が気にかけていたカレンダーに視線を向ける。

ようやく、来週の月曜日――つまり五月二十四日がなんの日であるか思い出したのだ。

皮肉だが、『あの女』というキーワードがきっかけとなった。またたく間に邦之の心の中に、暗雲が立ち込めてくる。

「忘れるわけないだろう。――衿子(えりこ)の命日を」
今この瞬間まで忘れていたと正直に告げる必要もない。
邦之はデスクの上の煙草(たばこ)の箱に手を伸ばし、一本取り出す。手慰(てなぐさ)みに指先で弄(もてあそ)びながら、時間の無駄でしかない母親の嘆(なげ)きを聞き流す。
十二年も前に事故死した人間の記憶は、両親の中で美化される一方だと、邦之はうんざりしている。
弟である邦之にとっては、三歳違いだった姉、衿子の記憶は、美化のしようがないほど最低なままだというのに。
『それで、今年の法事には出てくれるの？　去年は少し顔を出しただけで帰ったでしょう。今年もそんな調子なら、衿子が悲しむわよ』
母親の戯言を思わず鼻先で笑ってしまった邦之は、慌てて咳き込んでごまかす。
どんな両親であれ、機嫌を損ねるのは得策ではない。こんなところばかり要領がよくなり、一方で薄情さに拍車がかかってきていると、邦之は密かに苦笑を洩(も)らす。
「仕事が忙しいから法事に顔は出せないけど、墓参りには行くつもりだ」
『大事な日なんだから、仕事の調整はできないの？』

「衿子の命日は大事だけど、だからといって、仕事で不義理をするわけにはいかないんだ。とにかく、墓参りは行く」

いかにも世間知らずな母親の言葉にイライラしつつも、邦之はそれが声に出ないよう気をつけながら、穏やかな声で諭す。こんな電話はさっさと切ってやってもいいのだが、後々面倒になるのは目に見えている。

渋々ながらも母親が納得したので、ようやく話を切り上げることができた。

無意識のうちにやったらしく、手の中で煙草が真ん中から折れていた。母親との電話で要した自分の忍耐力を見たようだ。

灰皿に煙草を放り込んで邦之は立ち上がる。胸に残る苛立ち(いらだ)を飲み下すため、コーヒーでも入れてこようと思ったのだ。

※続きは製品版でお楽しみ下さい。

贖う愛

《立読み版》

発行日　２０１１年１１月２５日
著者名　北川　とも
イラスト　藤崎　寛之丞
発行所　【ＭＩＬＫ－ＣＲＯＷＮ（ミルククラウン）】
株式会社水晶院
http://www.milk-crown.net/

(C) Tomo Kitagawa 2011

※本著作物の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。